異色対談

時代の中の学生像

フジテレビ執行役員・生活情報局長

太田英昭

×

文芸評論家・関東学院大学助教授

富岡幸一郎

テレビマンと文芸評論家の顔合わせは、一般紙誌を通じても異例にちがいない。ともに本学出身である。敏腕プロデューサーのまなざしと批評家の視線がクロスして、あの「激動の70年前後」と変容するいまを照らし出す。全共闘のころ、三島由紀夫の死……そしていま学生に何が問われているのか。

太田　69（昭和44）年にぼくは卒業しているのですが、ちょうどその年の1月、卒業直前に象徴的な大事件があった。いわゆる安田講堂事件です。入学したのが65年ですから、大学にいた4年間はまさしく「政治の季節」でした。

ぼくは北海道の出身なんです。政治的な出来事など関係なく極めてのどかに高校時代を笑い転げて過ごしてきた18歳が、神田駿河台に来たとたんに疾風怒濤のど真ん中に放りこまれ、翻弄されつづけた4年というのが実感です。まわりにいた連中や先輩たちも、本当にクレージーなぐらいエネルギーを充満させた人間が多かったので、いい意味でも、あまりよくない意味でも新たな遺伝子を自分の体に打ちこまれたような時代だったと、いまでもそう思います。

「政治の季節」

――入学のころのスローガンといいますと？

太田　65年、昭和40年は日韓条約が批准（6月調印、批准は12月）された年で、「日韓条約批准阻止」「ベトナム戦争反対」のタテ看だらけでしたね。ベトナム戦争もバンバンやっている時期で、ぼくも熱に侵されて東南アジア研究会というサークルに入って、なぜアジアは経済的に離陸できないのかというような議論をして大学1年生を始めています。

――授業は一応正常に？

太田　授業はそれなりにやっていました。学生会館の自主管理をめぐる闘争もあって、70人ほどいたクラスの中で自治委員を選ぶことになって、どういうわけか、ぼくが政治学科1年29組の自治委員に選ばれた。高校のころから動いていたやつらの中でいうと、なかなかやりにくい雰囲気があったらしくて、立候補もしてないのに一番わかっていないぼくが選挙で選ばれて、何かよくわからないスタートを切ったのです。その

結果いろいろなセクトからのオルグやら何やらバカスカ受けるような時期があったりして、義理やら縁やらで、セクトに入りはしなかったけれども、学内に立てこもったりというような時期にはよく泊まりに行っていました。

三島由紀夫「体験」

――富岡さんは77年入学だから、ほぼ10年違い。この間の10年という変化はかなり大きそうですね。

富岡　そうですね。ぼくの時代は完全に学生運動は終焉していました。1970年は、中学1年生ですから。ぼくにとってはこの「1970年」が一つの転機、目覚めの年ですね。なぜかというと三島由紀夫が11月25日に市ヶ谷で自決した。そのとき、三島由紀夫を知らなかったのです。ただ、昼の零時何分かに市ヶ谷で自決して、教員が職員室で騒然として、テレビが「三島由紀夫が切腹した」とバルコニー演説の映像などを流し続けていたのを覚えている。ぼくは三島を知らないものだから、聞き違えて青島幸男が腹切ったのかと（笑い）。

当時、青島幸男がテレビではやっていて「なんで青島幸男が切腹したんだ」と言っていたら、教師が興奮して「ばかやろう。おまえ三島由紀夫を知らないのか。三島というのは偉い作家なんだ。ノーベル賞の候補にも挙がった作家だよ」と。家に帰ったらどの夕刊にも出ていて、朝日新聞には三島の生首の写真が載っていました。テレビをつければもうその報道で、それが何も知らない少年、ガキにとっては、例のないショックでした。一体これはどういうことなんだろうと。それ以降は三島の本を読んだり関心を持ってきた。

――その体験が在学中の79年、21歳で書いた「意識の暗室―埴谷雄高と三島由紀夫」（群像新人文学賞）に結実して、在学中に文芸評論家デ

とみおか・こういちろう

1957年東京生まれ。83年中央大学文学部仏文学科卒。「意識の暗室――埴谷雄高と三島由紀夫」で群像新人文学賞（評論優秀作）を受賞。在学中から文芸評論活動に入る。戦後派作家を論じた『戦後文学のアルケオロジー』、『内村鑑三』、小林秀雄、福田恆存らを通して近代日本の精神を問う『批評の現在』、『使徒的人間　カール・バルト』、『言葉　言葉　言葉』など著書多数。

おおた・ひであき

1946年旧樺太生まれ。69年中央大学法学部政治学科卒。フジテレビ入社後、「小川宏ショー」「スター一千一夜」ディレクター、「なんてったって！好奇心」、特番「アルビン・トフラーのパワーシフト」などをプロデュース。放映中の制作番組では「めざましテレビ」「とくダネ！」「ＥＺ！ＴＶ」など生の情報番組と「ザ・ノンフィクション」などドキュメンタリー・ジャンルを統括する。

ビュー、となるわけですね。

富岡　書き始めたのも、「無知なる三島体験」あったからですね。たぶん三島がそこで自決しなかったらだいぶ人生変わっていたんじゃないかと思いますよ。

ぼくは中大の1年生のときは駿河台なのです。2年生からこっちの多摩校舎になりました。駿河台には、まだ60年代後半からの一種の空気があったような気もするのですが、こちらに移るとこういう自然の中の非常に広いキャンパスで、たぶん学生意識もそのあたりから変わったんじゃないか。タテ看が立っていてもこれだけ広いと目立たないですよね（笑い）。バリケードも組みようがない。学生運動が完全に終焉してそういう学園状況が出てきたのが、ぼくらがちょうど入ったころだったと思います。だからおそらく太田さんが卒業された後とぼくが入るぐらいの、70年代の10年間で、大きく日本の社会も大学も変わったのではないかと思います。

映画「突入せよ！」「KT」…脱色して回想する70年代

――全共闘運動の終焉を象徴づけたあさま山荘事件が72年（2月）ですね。映画「突入せよ！」が公開されて話題にもなりましたが。

太田　見ましたよ、気になってね。ちょっとすごいというか、現場の警察部隊を指揮した佐々淳行（原作者）さんがいかにヒーローかという、そういう映画なんですよね。それにしても立てこもっている側（連合赤軍）がなぜ立てこもったかというそちらの話が一切ない。とにかくあさま山荘を占拠され、しかも人質を奪われたときに警察がいかに必死に頑張ったか。それはまさしく事実だったと思いますが、何となく不思議な映画だなという気がしましたね。

富岡　ぼくはまだ見ていないのですが、ここ1～2年かな、小説それから評論、あるいは映画もそうですが、結局あの時代、70年前後の懐古ものがずいぶん出てきている。

文芸評論でいえば三浦雅士が『青春の終焉』という本を書いた。これは、要するに60年代から70年代前半は熱い青春があった時代なんだということなのです。いま、それが終わった、青春が終焉した。あるいはもう少し広く言えば近代的な価値観が終焉したんだということを言っているわけです。ぼくはそれにちょっと批判的で、事実そうかもしれないけれど、いまの時代から見た懐古的なパースペクティブが、独特な雰囲気をつくってしまっていて、太田さんがおっしゃった「突入せよ！」の映画にしても、当時あったイデオロギーとか背景というものがとれてしまって、何か1つのドラマというかたちで作られてしまったのではないかという気がするんです。

このあいだぼくは、金大中拉致事件（73年）を描いた「KT」の映画評を『映画芸術』で書けといわれて試写を見たのですが、日韓合作のこれも全くイデオロギーが脱色されているのです。阪本順治という若い監督で、ぼくよりも若い人ですが、イデオロギーを完全に抜いた一種のアクション映画なのです。金大中が諜報機関のKCIAに拉致されるという、それがアクション仕立てで展開する。これはあの時代を、いま映画とか評論とかで懐古しているときの特徴じゃないかという気がする。

太田　そういう時代なんですよね。ぼくも先日「KT」を見ました。阪本監督は「どついたるねん」で素晴らしいデビューをした監督で、今回のもエンターテインメントとしては

けっこうよくできているなという気がしました。しかも自衛隊が介在したということをフィクションとはいえ、かなり明快に入れていて、なおかつ自衛隊であの事件に介在したと映画的に語られている主人公は、自衛隊という制度そのものに対して極めて否定的、つまり軍隊を目指したのか軍隊を目指していないのかをはっきりしないままポヤポヤの組織であることが納得できずに一つの動きを起こすのです。そういう意味で言うとお話のあった20年前、30年近い前の出来事の全体性をとらえる努力があったのか、なかったのか。それはどういうことなんですかね。

富岡　見ていないのですが、連合赤軍事件の映画もありますね。

太田　「光の雨」。

富岡　そう、立松和平の原作ですが、あれもたぶんそういうところがあるだろうと思います。一つはいま現在の日本の社会の空白感、価値の崩壊感のようなものがあって先が見えない。そういうなかで、あの時代には何かあったのではないか。混乱の時代ではあったけれども、三浦雅士のいう「青春」というか、日本人の熱い何かが政治にも社会にも文学にも、あるいは大学にもあったのではないか。

そのようなちょっとノスタルジーもあるし、それは現在の空虚感とつながっているのかなという感じもするんです。

ひたむきに燃えた時代

太田　熱ということでいうと、イデオロギーの部分を肯定するか否定するかを離れて、当時は本当にまわりに緊張感というか熱気があったような気がします。

北海道の同じ中学校の出身で防衛大学校に入った友達がいましてね。彼は中学、高校を通じても別に〝軍隊〟に入るようなタイプではなく大変温厚な人なんだけれど、いろいろ事情があって防衛大学校へ入る。大学に入りたてのころ帰省したときに、ばったり会ったんですよ。彼は私服ではなくて防衛大学校の制服を着用していた。二言三言「おう」と話かけるときに、もう既にぼくのほうには東京で得た大学での雰囲気のようなものが何か体に入り始めていて、防大生のかつての友達に話すときにお互いにバリアが張られているような気がした。彼は彼でその制服を着てしまった自分という部分でいうと、やはり何となくね……。それがすごく鮮烈な記憶として残っています。

彼は彼で防大に入った瞬間、この国の中で自衛隊が持っていた、その当時の30年ぐらい前の存在感の意味、どう見られているかを体験しただろうし、ぼくのほうは自衛隊とは何かをよく考えもせず、彼は遠くへ行ってしまったなというように思っているような感じでしたね。何かそれぞれに、ひたむきになりかけたり、せつなく燃え始めたりというのが確かにあったことは事実です。

富岡　いろいろ方向は違っても、ひたむきさというか、そういうエネルギーがあったんでしょうね。ぼくは三島事件のときに中学生だったわけですが、少し上のいわゆる全共闘で当時やっていたぼくよりも5歳かちょっと上ぐらいの連中とわりと付き合っていました。いま社民党の代議士になった保坂展人君はぼくの中学の2級先輩だったのですが、「中学全共闘」を名乗って内申書裁判をやっていました。

で、彼はいまだに中学のきねづかでメシを食っているとぼくは思っているんだけれど、ついに代議士に

なった（笑い）。みんな制服を当時着ていましたが、彼は白いトレンチコートを着たりして、文化祭などでも演説をぶっていた。少し遅れてきた世代としてそういう影響は受けたところがあるのです。ぼくにとってもそれは非常に面白かった。

話し続けていた

太田　富岡さんは大学で教えられているから、日常的に20歳前後の人たちと話す機会とか彼らの生活を見ることが多いと思いますが、いまの学生はどうなんですか。ぼくはたまたま息子がそれぐらいの年齢ですけど、ほとんどあまりわからないわけです。つまり昔はよかったなんて言うつもりはさらさらないんだけど、当時のことを振り返ってみるとやたら「話し続けていた」という記憶があるのです。

いまの大学生の話を聞いていると、親から仕送りを受けてマクドナルドやどこかでアルバイトして金を稼いで、女の子と一緒に温泉へ行ったり海外旅行をしたり、なんて言うわけですよ。聞くだにどうなっているんだ、この国はと（笑い）。憂うほどにぼくは仕事も何も出来ていないのだけれども、率直に言って世界中を探してもそんな国はないだろう。

60年代、70年代の大学にいた連中でも女の子と遊んでいた人も多かったと思うのですが、ぼくのまわりを見ていると、東京育ちの人もそうでしたが、よくぞ朝から晩までしゃべっていたという記憶があるんですよ。まず下宿、アパートでとにかく話しこむ。喫茶店は名曲喫茶からジャズ喫茶まではしごしたりして2時間、3時間、4時間と滞留して延々話している。それは人生から恋愛、政治のことまで含めて極めて幼いレベルだったのだろうけれども、あのエネルギーたるや異常ではないかと思えるくらいです。

それが何だと言いたくはないのだけれど、いまの人たちでそういうことをやっている人はやはりいるんですかね。

富岡　いや、たぶん形を変えてあるとは思うのです。ただ、どうなんでしょう。ぼくらも喫茶店などにこもってしょっちゅう議論をしていました。高校、大学時代もそういう流れでやっていましたね。ただ、ずいぶん話題が違うんじゃないかな。人生をいかに生きるべきかというようなことはあると思いますが、話題の材料が変わってきてしまっているような気がする。ぼくらの頃も、文学とか思想の議論がありましたが、いまそういった広い意味のイデオロギーというか、文学、哲学、思想というようなことを熱心に語るという雰囲気ではないですね。

太田　日本では詩集、ポエムは売れない。しかし発展途上国、第三世界では必ずベストテンに詩集が顔を出しているようですね。これはどういうことなんでしょう。豊かになっていない国でしか詩は売れない、いろいろなことを夜を徹して語り合うなんていうのは貧しいからやっているんだという暴論もあるようですが、でもそれは暴論には思えない。

60年代、70年代は貧しい時代だった。まだ日本が本格的に豊かになる手前の時期で、ぼくが最初に借りたアパートは椎名町のボロアパートで3帖1間、4千か4千5百円ぐらい。共同炊事場と共同便所が付いている、台風が来ると揺れるようなところでしたね。そういうところに試験が近づくと4人も5人もやってきて、サントリーレッドを飲みながらワイワイガヤガヤにわか勉強をやっているわけです。そういう貧しさがあったからなのかな。ぼくとぼくのまわりがとびきり貧しかったわけでもなかった。いまの諸君は、ちょっとアルバイトをやればすぐにけっこうなお金を稼げて、仕送りを合わせれば女の子とグアム島でもどこでも遊びに行ける……。遊んでいるから

悪いとは言わないけれども、何か大事なことを語りあう前に自分の個人的な楽しみばかりのほうへ行こうと思えば楽に行けてしまうというところがやばいのでしょうかね。

個人と社会の断裂…決定的な「80年代変容」

富岡　ちょっと理屈っぽく言うと、個人レベルで自分はどうするべきかとか将来の不安もある。だからそういう議論はいまもあると思うのですが、70年代後半から、決定的に変わったとみています。個人である私と、社会・世界との通路のようなものが消えてしまった。

　ぼくはいま大学でサルトルの講義をしているのです。実存主義とは何かというのを。「実存は本質に先立つ」とかやっているわけです。サルトルは自分が主体的に生きる、それが自由だと言う。だけど、それは決して個人主義ではない。自分が参加する、アンガージュマンは、結局全人類に対する責任なんだと言っているわけです。ただ、そこの全人類と私のつながるところを説明するのはいま非常に難しい。個と社会との関係の意識の濃さのようなものがなくなってしまっていて、個人の問題としては普遍的な自意識というのがあると思うのだけれども、自分と社会とのかかわりがなくなった。

　社会に対する無関心、あるいは歴史に対する無関心というか、これだけいろいろなことが世界で起こっていても無関心。どうもそういう意識の反映がいまの状況かなという感じです。それがいつごろからかというと、やはり80年代、70年代後半からの流れでしょう。それはいま太田さんがおっしゃった、一つはそういう物質的な充足があると思うのです。あるいはバブルですね。

――「80年代変容」は、戦後的時間の延長というよりも非連続という形でいきなり未知の社会段階に上がった、それくらいの質的変化だったような気がしますね。貧しさゆえの手応えや充実感、いわば「貧のリアリティー」もキレイさっぱりなくなった……。

富岡　そうですね。思想面では、マルクス主義に代わって現代思想＝ポストモダニズムが80年代は主流になっていく。ポストモダニズムというのは、豊かさや近代化へ向かって個人なり国民なりが行くんだという近代の目標がある意味で達成された。あるいはそういうものがどこかで変わってしまったという意識があって、それがたぶん80年代のポストモダン的感覚、ちょっと浮いているような浮遊感というのが出てきたような気がするんです。

太田　60年安保の後、池田勇人首相が所得倍増計画を打ち出し、それから通産大臣田中角栄さんが日本列島改造論を発表したのが72年。そのあたりから離陸が始まって、80年代に離陸しきって豊かさをみんな実感し始めて、なんだアメリカも大したことない、同じじゃないかというころまで80年代の半ばで行ったわけでしょう。いまから考えると、そのときに「何のために、さらに豊かになるのか」と考えることをきちっとしなかった。

　ぼくらもど真ん中で生きていたわけですから全然ひとごとではないのですが、何が生きるための価値なのか、豊かさって何のために追求するのか、この世界をどう完成するのかというようなことについて考えないままに、個人の豊かさの中にすべて埋没してバブルに入ってしまった。

　この国は世界とちゃんとした関係を築かず、みんなの血と汗で蓄えた円という力をどんどん持っていかれそうになっている。または必死になってアメリカを支えてしまう構造になっていて、何かわけのわからない国になったまま、もう10数年も経過している、そんな気がするのです。

　つまり何のために生きているのか、何のために働いているのかという根

源的なことをあまり考えない。ハングリーな時代から突然豊かになって、そしてバブル崩壊、右往左往したままアイデンティティー不在の国としてアジアからもヨーロッパからもアメリカからも低く見られ始めている。ぼくももう55歳になったのですが、それは痛烈に感じます。

「プロジェクトX」とモラル・ハザード

太田　NHKの『プロジェクトX』はこの数年で久しぶりの大ヒット番組です。

あれはひた向きに生きていた時代の、世界、あるいはアメリカという恐れおののくところとも切り結ぶような、企業戦士を中心とした挑戦の物語ですよね。

そのころは、現場はモラールなんていう言葉は必要ないぐらい厳しく自分を追い詰め、チーム全体が打って一丸というようなところがあった。つまり倫理欠如のようなものはなかった時代なのです。当然いろいろな問題局面はあったのでしょうが、まともに必死で働く、一生懸命頑張るというのが本当の美徳であったと、それがいまごろになってあの時代の新商品開発の過程が語られ、多くの人々が支持しているということは、モラル・ハザードが全局面において数年前から起きていることの反動なんだと思う。

教育の世界でもそうだし、行政の世界でもそうだし、今度の外務省のことだって別に外務省の役人だけのことでは決してない。なぜかくもモラル・ハザードがこの日本という国の中で全局面で起きてしまったのかということの理由が、ぼくもよくわかっていないのですが、そこを突き止めないと駄目だと思う。その点でいま学生のことを言うと、ぼくらが30年前にどうだったなんて全然誇りにしているわけでもなんでもありませんが、いまこの国に存在してしまった嫌なぐらいの倫理の欠如感について、若い人たちは何も怒っていないのか。まあそんなものだろうと絶望していてそれで済んでいるのか。斜に構えて自分は自分でいいのよというようなことで10年、20年後を生き切れるのかどうなのか、不安を感じていないのか、それをすごく感じます。

懐古的な神話作用

富岡　『プロジェクトX』が話題を集めた背景にそれがありますよね。ただぼくは一個一個は面白いんだけれど、あれも典型的な懐古的な、一種の神話作用ではないかと思うんですよ。

太田　いいとこ取りの。

富岡　いいとこ取りがすごくあって、面白いけれど……。つまりああいうものを発掘しないと、発掘というかどこかで物語をつくり直さないと日本人が元気になれないという、これは非常に情けない状況の反映だと思うのです。

一個一個やったことはそれなりに面白かった、意味があったと思います。でも逆にいうと、さっきの70年代の懐古もそうだし、『プロジェクトX』の高度成長時代に活躍した企業の戦士の物語にしても、やはり後ろ向きなのです。日本の20年、30年前の後ろ向きのことを見て、いま空白だから何かカンフル剤を入れようというような、どうもそういうところは問題があるのではないかと思うんですね。

「戦後」が忘却したもの

太田　あのときはよかったよなというような。

富岡　そう、あのときは、頑張ったな、日本人は大したものだったんだよというようなところがあって、それがぼくはやはり後ろ向きの懐古的な現実だ、言論だと思うのです。モラル・ハザードをとってもそうだし、さっき個人と世界と言ったけれど、日本人として生きているこの自分、私というこの存在と、例えばこの国とか国家とか地域というものとのかかわりが希薄になっている。あるいはこの国の歴史でもいい。教科書問題がいろいろ出ましたけれども、たった50年ちょっと前の太平洋戦争、大東亜戦争に関して、例えばいまの若者がどういう意識を持っているかというと、ほとんど自分の思考の中に入ってこないというところがあると思うのです。

どこかでこの戦後という歴史を日本人が適当にやり過ごしたというか、あるいは江藤淳ふうに言えば「忘れさせられたんだ」ということになるわけですが、都合よく忘れたり忘れさせられたりしてきた問題がいま出てきているのではないか。だから歴史に対するまなざしのようなものがもう少し出てこないとまずい。でもこれはなかなか難しいですよ。現場の学生なんかを見ていても、前の戦争といったって、いつの戦争だかわからない具合ですから。

太田　戦争に負けてアメリカを中心とした力によって、7年間占領下に置かれた。その間アメリカは用意周到にさまざまな仕掛けを施して、講和条約（1952年＝昭和27年）を結ぶ。それが発効して、つまり独立を回復して、ことしでちょうど50年です。サンフランシスコ講和条約、アメリカよ、ありがとうという催しは去年盛大にやりました。でもこの国から見て独立して50年、はたして日本は独立国家としてインディペンデントに世界とちゃんと切り結びながらやっているのか。この国はこの国の持っているよいところを浸透させつつ、世界に迷惑をかけないように、世界に貢献できるようにちゃんとやりましょうと世界に向かってアピールするぐらいのことをやるべきなんだと思う。

フジテレビでは12月8日のパールハーバー・アタックの日に、日本という国が自立した国家であるために何が必要なのか、何が欠けているのかという特番を90分のドキュメンタリーでつくる予定なのです。これはフジテレビのパブリシティーでも何でもなくて、さっきの話に戻ると独立して50年という発想があまりない。本当にはたしてこの国は独立しているのかという根本的なことが、いま富岡さんがおっしゃるように、基本構造とか基本線をきちっと点検したり総括しないまま、メディアを含めてずっと来ている。ぼくはあと何年生きるかわからないけれど、いまの20代の人たちは本当にのん気にしていていいのかなというのが、はっきり言って僭越ですが大変疑問です。

小説『忿翁』の怒り

富岡　最近の文芸の話なのですが、古井由吉が『忿翁』という小説を書いた。古井さんは戦争が終わったとき小学生ぐらいかな。空襲体験ももちろんはっきりあるわけです。『忿

翁』は短編集なのですが、それぞれ初老から老年にかかる人物が出てきて、いろいろな場面で憤っているわけです。例えば、新幹線の席を取ったとか取らないとか、じいさんがすごく憤ったりする。ときにすごく理不尽な怒りや憤りがバッと出たりするわけです。これは単に人間が年をとってくるとそういうふうにうるさくなるということではなくて、実は古井さんが考えているのは、これは「戦後の問題」なんだということです。つまり戦後の日本人は敗戦を迎えて、あの敗戦の大変な悲劇と屈辱があって、それを非常に巧みに7年間のアメリカの占領政策で懐柔された。つまり怒りのエネルギーがうまくコントロールされて、その後の高度成長で物質的な豊かさを目標に向かっていった。ところがここに至ってこれだけモラル・ハザードが起き価値観が崩れたときに、その怒りがいま逆に戻ってきたのではないかというようなことを古井さんは言っているのです。非常に面白いなと思っていて、だから太田さんが怒っているのも（笑い）、『忿翁』という意味ではまさに戦後50年の問題が噴出してきているのではないかと思います。

歴史とは日本語

――「ゆとり教育」とともに、中学の国語教科書から漱石、鴎外が消えたことも話題になりましたね。

富岡　そうですね。だから、ああいうのもぼくは歴史、それからもう一つは日本語という問題だと思う。歴史とは何かといえば言葉です。日本語です。だからその言葉というものに対する喪失感をぼくはすごく感じています。言葉を失うということは決定的に民族の崩壊になると思うのです。国語というのをどれだけ保持できるかということはとても重要です。教育はもうそこに尽きるとも言える。藤原正彦さんという数学者が書いていましたが、数学をやるにしても国語能力なんだ。だから一に国語、二に国語。日本人は英語が下手だから幼稚園とか小学校から英語をやればいいというのはとんでもないことであって、やはり自分の母語、日本語というものをしっかりやらなければいけない。

ところが、大学で国文科という学科がものすごい勢いでなくなっているのです。人間文化学科とか比較文化学科とか、国際なんとか学科みたいな名称にどんどん変わっている。いわゆる国文科は消滅しようとしている。これは非常に大きな問題です。それはいま言った日本語の問題、それから歴史に対する問題です。史学科というのも、たぶん国史なんていうのは少なくなったんじゃないかな。だからそういう意味での大学のいまの構造改革も非常に問題があって、質的な観点から見れば、やはりそう簡単に流れていくわけにはいかない、と思うのです。

太田　要するにコストパフォーマンスという発想がすべてのところに押し寄せてきた。大学も社会のニーズにどれだけ応えられるか、というふうに。わずか30年前に「産学協同ふざけんな。阻止」と学生はやっていたんですよ。産学協同そのものをアメリカは全く悠々と、当たり前のことだとやっている。いつの間にか日本だって産学協同は何の問題もない、お互いに協力し合って、現実を知っているところとアカデミックなところがコラボレーションをやるほうがいろいろな意味で社会に役立つ。それは一方においては全くオーケーです。ぼくは何の反対もしません。先行的に始めている大学は経営的にも安定するのでしょう。

ただ、もう一面の富岡さんがお話しになった問題です。社会的には必要とされていないこと、つまり社会のマジョリティー、社会の根本の部分からは必要とされていないかもしれないけれど、文化という面に関していうと、掘りこんだかたちでの研

究なりリサーチなりが持続的になされていなければ、下手をすれば日本の文学そのものもアメリカの日本研究所の専門家のほうが詳しくなりかねないようなことがあるわけでしょう。そういう意味で言うと、とても難しいことではあるのだけれどコストパーになじまないようなものもあるんだということを大学も考えたほうがいいし、またメディアもそうなのです。

ぼくがいま籍を置いているテレビというメディアで言うと、100％すべてにわたって視聴率至上主義ならメディアではないと思います。テレビメディアはいろいろな意味である種の役割を持っている。エンターテインメントも、報道も、イベントもそうです。だけどそれがすべてにわたって効率のみを追求して、利益のみを追求するなら、おそらく社会から信頼、信認は受けない。企業体ですから利益を追求するのは当然です。だけど視聴者とのある種の黙契というか契約というのは、ここぞというときを含め日常的にテレビというメディアも、有用性があり役に立っているというようにエンターテインメント以外の面でも期待されるべきであり、それが何なのかということについて勘違いをしてコストパーのみを追求するようなメディアであれば、それは本来社会的存在としても相当瑕疵があるとぼくは思っています。それはきれいごとではなくて、各局それぞれＮＨＫも含めてちゃんとやる人がいなければ、こんなものは国民の財産でも何でもありません。

ワイドショー…テレビの文体をめぐって

――太田さんは朝のワイドショーの制作責任者でもあるわけですね。

太田　「ワイドショー政局」とか「ワイドショー内閣」といった言葉があって、ある種ネガティブな文脈で語られていますよね。本質的なことを伝える努力がないまま、ワイドショーが妙に影響力を持っていて、訳のわかっていない大衆がいい加減なワイドショーに汚染されている。これは単なるポピュリズムだ、といったように。しかし、ぼくに言わせればワイドショーがそんなに影響力があるなら、ワイドショー風情に影響力を奪われてしまっている新聞はどうしてるのか、テレビの報道はどうしているのか。笑ってしまうよ、とぼくは思っています。

実は私が統括している番組の中に、「とくダネ！」という朝のベルト番組がある。以前の「ナイスデー」はいわゆるワイドショーで、刺激的な事件とか芸能人のスキャンダル、ゴシップが中心だった。ところが、私も現場のメンバーも、どうも違う、と考えていて、4年前に番組をスタートさせるときに、あえて「脱ワイドショー」という宣言をして、全然違うことを始めています。

ただ、それも含めてワイドショーといういわれ方をしていることに関していうと、ぼくらの番組が変わったから関係がないなんて全然思っていません。たださまざまなジャンルでさまざまな番組がいまの政治をどう語ろうとどうしようと、それはいいんだと思う。表現の自由なんてそんな大きな言葉は使いたくないけれど、今の政権について興味のある人間、田中真紀子さんはどうしたこうしたから始まる。それはいいんです、誰が何をやろうと。なぜワイドショーだけを妙にスケープゴートのごとく語っているのか、何かおかしいという気がします。逆に言うと何を怖がっているのですかと。

富岡　週刊誌なんかは、そういう意味では一番ポピュリズム……。

太田　ですよね。一般的な語られ方でいうと、例えば政治家の発言とか、高名な政治畑のジャーナリストまでが、よくワイドショーのようなものに振り回されて政局が動いたり、ワイドショーによる人気投票のようなもので閣僚が評価されたり、そう

いうのは許しがたいというようなことを言っている。はたしてそうなのでしょうか。木を見て森を見ず、なのではないでしょうか。むろん、私たちがより本質に迫る努力をすべきなのはいうまでもありませんが。

富岡　テレビを見ていて僕が感じるのは、さっきの言葉とも関連することなんです。いつごろからなのかな、お笑い番組とかエンターテインメントの番組もそうだけれど、文字（スーパー）が出るようになったでしょう。例えば俳優とかお笑いの人がしゃべった文字が下にガーッと出るわけです。あれは確かに効果はあるし、いろいろ技術的な面白さがあると思うのだけれど、あれは何なんだろうかと。

あれは、耳で聞いてその人がしゃべっているある文脈というのを、視聴者がそれなりに受け取る時間というか、理解の速度よりも早く出てくるわけです。だから見ていてものすごく楽なのです。おそらく文芸誌などもそうなってくるのだけれど、とにかくわかりやすく、早く、簡潔にその情報を伝えればいい。それを受けとる努力を視聴者とか読者がしないで済むようなテクノロジーや発想が、ものすごく進んできたのではないか。だから、その結果言葉というものに対してはほとんど空気みたいというのがあって、ぼくはあの字が出てくるのをいつも不思議に思うのです。

――言葉の編集ですよね。

富岡　そうですね。たぶんいまの若い人や中高生なんかは小さい頃からそれに慣れてしまっているから、例えばちょっと硬い映像を見ても受けつけなくなってしまうのです。

ぼくは去年ＮＨＫがやった「映像の世紀」というのを使って、20世紀の思想と歴史という講義をやったのだけれど、あれは非常に貴重なフィルムでよく処理されているのですが、講義ではそれでも硬い感じなのです。逆に言うと、いまはもっと単純に受けられるというか、映像そのものを見る努力をしないで済むようなシステムが蔓延してしまっているのではないか。それがたぶん学生などが物を知る、物を自分が取り入れるという努力というか忍耐力を、逆にすごく殺いでいるのではないかと思っているんですが。

太田　それは確かに面白いご指摘だと思います。読み解く力がどんどんさらに殺がれていくかもしれない。スーパー・テロップの色とかサイズ次第で、どこを強く伝えたいのか、どこが実は遊びでどう思えばいいのかというところまでも、すべてあのスーパー表現技術で、ある意味でいうとはっきり方向付けてしまうわけですからね。ということは、本当は聞き手によってはここは面白いのかな、どうなのかなと思っているのに、ここは面白いと思うべきなのだというようになってしまう。意味の押し付けというか、それは確かにあるでしょうね。

富岡　例えばいまの学生は読書をしなくなった。文学部の学生だって本を読まない。本という媒体は読みとるという意味では、すごく努力が要るわけです。でもそれが面倒くさくなってしまう。ましてＩＴ時代ですから、多様な情報が入ってくる。それはやはりちょっと問題で、本を読めと言うんだけれども、とにかく本を読む習慣というのがものすごく少なくなってしまっていますね。

寺山修司が見た多摩キャンパス

富岡　中央多摩キャンパスができたときに聞いた話なんですが、寺山修司がこの多摩に講演で来て、大きな階段教室で、彼はイスに注目したというのです。

軸が1本になっていて、その軸を中心にしてイスがクルクルッと回転する。回転式で自由に動くし非常に座りやすい。寺山修司は「そのイスはすごく自由に動くね。だけどその

軸からは絶対に外れないようになっているね」と言ったそうです。つまり一見すごく自由に見えるけれども、ものすごく管理された自由の中に君たちはいるね.といういかにも寺山修司らしい表現です。

昔の神田では、わざわざ机といすを教室から持ち出して積み上げて中大の叛旗派の連中とかがバリケードをつくったわけじゃないですか。あれはまさにイスと机の使用目的を違うものに変えたわけです。それをこっちに来たときは学校側はちゃんと管理して、自由に動く。だけど絶対にこれはボルトを外さない限り……。ボルトもそんなに簡単に外せないですよ。ほかのところには持っていけない。だから自由の空間というのが常に限られている。でもそこに座っている人間にとっては、これが自由だと思うわけです。そういった空間が至るところにあって、たぶん大学だけではないと思います。ぼくは学生なんかに別にそれを破壊しろとは言いませんけれども、ただそういうことの相対的な自覚というのは持ったほうがいいと思うのです。

太田　田中康夫さんが『なんとなく、クリスタル』（81年）を書いて話題になったころ、モラトリアムという言葉がありましたね。大学というのはモラトリアムだ、猶予期間を楽しく生きてというような部分があったけれど、いま21世紀、あれから20年以上たっているのだけれども、学生の気分で大学の4年間ってどういうとらえ方なんですかね。

富岡　たぶんモラトリアム気分というのは、今の経済状況でだいぶ変わってきたと思います。だから、ある意味で学生はものすごくまじめになってきていると思います、授業に対する態度とか出席とか。やはりそれは今の経済状況、端的に言えば就職です。産学協同のことが出ましたが、大学がいま産学協同路線で、昔「産学協同、断固反対」と言った教授が、結局いまや教授会でいかにして産学協同を確立するかという問題を苦労しているわけです。

ぼくは太田さんがおっしゃった文学部なんかでいえば、それとは別のすぐ職には結びつかないかもしれないけれど、一種の教養というか、そういう言葉や感覚を持っていることが大事で、たぶん日本の戦後の高度成長の前期ぐらいまでを支えたのは、やはり戦前の教養主義だったと思う。一高なんかの「デカンショ」――理科系に進んだ人も、デカルトやカントを読んでいたような、そういう一種の教養主義が生きていた。それが企業の指導者として引っ張っていった時期もあったと思う。だからプラクティカルな経営技術というだけではないものが人間の中にあって、それが全体を見る目になったような気がします。だからあまりにも産学協同となってしまったかなという気がする。

太田　教養というものに対する価値の置き方の問題ですよね。教養ということは人間がちゃんと生きていくためには必要欠くべからざるものであるというようなことでいうと、この間たまたま戦後史の調べものをしていてびっくりしたんだけど、岸信介が巣鴨プリズンに未決で入っているときに必死に愛読していたのは、たしか「四書五経」だったという。民は何をもって喜び、絶望しているのかというような話を含めて、政治家たらんとして中国の古典を読んでいる。小泉さんがＸＪＡＰＡＮを聞くのもオペラを聞くのもいいんだけれど、何か読んでいるものがいまの政治家とは相当違う。そうした教養の流れがきっとあったのだろうと思わせますね。

富岡　就職は厳しいですから、まじめになるのはすごくいいことだと思うのです。ただ、そのまじめさが授業には全部出席して、単位も全部取って、なるべくいい成績でというような、目先のことのことも大事だけれども、そういうところだけに偏

ると何かやはりバランスが欠ける。

授業中の私語も少ないですよ。言うことをよく聞きます。指示されれば動く。だからそれはさっきのイスのたとえではないけれども、教師としてはやりやすい半面、ちょっと問題はあるわけです。ゲバルトも困るんだけれども、もう少しいい意味の「教養としてのゲバルト」がぼくは欲しいですね。あるいはそういうほうに向かうまじめさというか、真剣さがあればいいと思うのです。

太田　会社の中でいうと、昔「新人類」という言葉がありましたね。あのころ新人類といわれた人々がちょうど40歳代に差しかかるんです。「全共闘」世代のあと、「オタク」より前の世代ですよね。フジテレビの中にもたくさんいますが、新人のころはまわりを気にしないので存在感が妙にあったのだけれど、いまや気にしているね。かつての「宇宙人」も普通の人間になってきてしまった感じだな。成長して、大人になったということではなく、どうも思ったよりちょっと迫力がない。

富岡　文学もそうだけれど、要するに文学史が成立しないんです。つまり歴史が成立しないのが一番問題だと思います。前にあったものが何かということの検討とか評価が明確にできないうちに次が来て、それがまた崩れて次が来る。戦後の思想・文化史はその繰り返しなんです。

そういう意味では、繰り返すけれども歴史感覚という問題をはっきり持つということが大事だと思うのです。

「個人戦」を生き抜く、知のフットワーク

太田　何ですかね。要するに妙に個人戦に入ってしまったんですかね。みんなでやりましょうと言わなくたって何かウエーブのようなものができて勝手におもしろいのがボコボコ出てくれば全体が変わるダイナミズムのようなものが発生するかもしれないのだけれど、それがないまま行ってしまう。だからモラル・ハザードが雪印から始まって外務省まで来てしまった事態も、それとある意味でつながっているような気がする。

変えなければいけないものが目の前にあるときに、自分より力を持った人が「いや、これでいいんだ」と言うと、サラリーマンとしては「いや、そうじゃないですよ」とはなかなか言えません。言えないまま、あらゆるところでいろいろな破綻が起きているわけです。では、どうすればどうなるのかというときに、高杉良さんの『金融腐蝕列島』のような格好いい話ならいいけれど、現実にはそうなかなかいかない。

目の前にある、それこそ「いまそこにある危機」とか、いまそこにある問題をどう整理し、処理してどう変えるかというやり方が、我々は決してうまくない。だからおそらくこういうことがあらゆる局面で起きているのですが、そのときにどうしたらいいのかというようなことについて、別にいまの学生にそんなことを求めるつもりはないけれど、社会に入ったらすぐ出合うわけです。どうも違うなと思うことが起きたときに、違うのがわかっていてどうするのか。ぼくもたくさん困っています。手をこまねいたまま２０年も３０年も会社を辞めないで頑張って生きていったらいいよ、なんてぼくらは言えません。

富岡　ふるい教養主義ではなく、このめまぐるしく変化する現実と社会にただ適応するのではなく、むしろ柔軟に、したたかに生きるための教養が求められている。知のフットワークですね。大学のシステムも、だから、いままでのタテ割りの学科のタコツボ主義ではやっていけなくなるのは目に見えている。大学人自体が、変わるかどうか。その意味では教師の側の問題も大きいと思います。